

東南アジアの都市形成とその前提

—ドヴァーラヴァティーを中心として—

新 田 栄 治

東南アジアの都市形成と国家形成については、紀元以後のインドとの交渉、とりわけ貿易活動の活発化による「インド化」にその要因を求める考え方が一般的である。本論では、近年の東南アジア考古学と東南アジア史の研究成果から、再検討を加え、東南アジアの都市の例としてタイのドヴァーラヴァティー（Dvaravati）の諸都市の形成と、その前提としての東南アジア内部での交易と人口の集積について論じる。

「都市」のさまざまな定義

都市とはなにか？ 歴史学、社会学等々の方面からこれまでにさまざまな定義がなされてきた。代表的な「都市の定義」には次のようなものがある。

- ①村落の内、城壁を持つもの（マウラー）
 - ②市場、堡壘、司法権、政治的独立、種々の特権、のすべてが都市を構成する。（ペロー）
 - ③都市とは2000人以上の住民を持つ集落（国際統計会議）
 - ④経済学的な意味での都市とは、農産物の供給を受けて生活している人々の大きな集落（ゾンバルト）
 - ⑤都市の経済的本質は、市場に立脚した集落（ヴェーバー）
 - ⑥人口増加、専門職人・商人の出現、富の集中、宗教的・政治的・軍事的な支配階級の成立、官僚制による統治組織の確立が都市の条件となる。その証明として、巨大建造物、遠隔地間交易、支配者のイデオロギーを示す芸術様式、文字、数学・天文学などの科学的技術の発達。（チャイルド）
- これらの定義は都市のある部分的特徴を述べており、総体としての都市を定義することはひじょうに難しい。上記の都市の定義には近代以降、現代の都市についての定義もあるが、草創期の都市、古代都市について、どのようなものであったかはまた別個のものである。都市の定義は容易ではない。

東南アジアの古代都市の特徴を挙げると次のようになる。

- ①政治的空間の設定：周囲を区画し、内と外とを分ける構造物の存在。環濠、土塁、城壁などの構造物が築かれる。
- ②宗教的空間の設定：宗教的施設、宗教的建造物、宗教的遺物の存在。神殿、寺院、それらの付属物が築かれる。
- ③経済的空間の存在：遠隔地交易を証明する遺物の存在。外界からの輸入品、移入品の存在がみられる。

これらをより具体的に目に見える現象として記述すれば以下のようなになる。環濠、土塁、城壁で居住域の周囲を囲み、その内部空間には、宗教建造物が築かれる。内部空間には食糧を消費する大

きな人口の集積体が形成されており、外部空間は内部空間居住者に供給される食糧生産地の機能をもつ。内部空間は市場の機能を持ち、外部空間からの商品が交換される。このような内部空間の社会を維持管理するために、職能分担があり、統治組織が存在する。

これらのことをひとことで表現するならば、新田による定義「物流と情報の結節点にできた巨大な人口の集積体」である（新田1996）。

従来の定説と遠距離交易の証拠品の再検討

東南アジアにおける都市や初期国家の誕生は、セデスが先験的に述べたように、ローマやインドとの交易が契機となって発生したというのが定説となっている（Coedès 1968）。1920年代からの発掘調査によって、東南アジアにはローマ、インドなど各地からもたらされたものが多数出土している（Bellina, and Glover 2004,70-79）。代表的なものにはつぎのようなものがある。これらの物品については日本の世界史教科書でも引用されるくらいに有名なものであり、東南アジアがインド、さらにはローマとも交流があったことの証拠とされる。以下のようなものがある。

ローマからの招来品

- ①ローマ皇帝アントニヌス・ピウス（Antoninus Pius）（在位135-161）金貨（152年造幣）（ベトナム南部、オケオ遺跡（Oc-èo）出土）（図1-1）

2世紀に東南アジアがローマと交渉を持っていたということの証拠として挙げられるものである。五賢帝時代の皇帝のひとり、アントニヌス・ピウスの横顔を刻印し、周囲にラテン語で彼の名前を刻印した金貨である。オケオ遺跡の発掘報告書に写真が掲載されているが、この写真では左を向いている。ローマ貨幣では皇帝の横顔は右向きであるのが伝統であり、当然この金貨でも右向きでなければならない。左向きなのは、写真のネガを裏表逆にしてプリントしてしまうミスを行った結果である。この金貨上部には何かがハンダ付けされたような痕跡が残っていることが重要である（Malleret 1962,Pl.XLの中左）。

- ②ローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌス（Marcus Aurelius Antoninus）（在位161-180）金貨（ベトナム南部、オケオ遺跡出土）（図1-2）

①と同じく、2世紀にローマと交渉があった証拠とされるものである。アントニヌス・ピウスの養子となり、彼の死後皇帝となった最後の五賢帝、マルクス・アウレリウス・アントニヌスの横顔と名前を刻印した金貨である。対ゲルマン防衛戦の軍事指揮官であり、皇帝であった彼は、同時にストア派のギリシャ哲学者であり、『自省録』という哲学書を残している。この金貨も前者と同様に、上部に何かがハンダ付けされたような痕跡が残っている（Malleret 1962,Pl.XLの中右）。ホーチミン市博物館蔵。

- ③ガリア帝国皇帝マルクス・ピアヴォニウス・ウィクトリヌス（Marcus Piavonius Victorinus）（在位268-271）銅貨（タイ西部、ウトン（U-Thong）、コク・チャンディン遺跡（Khok Changdin）出土）（図1-3）

ガリア帝国とは、ゲルマニア2州（インフェリオルとスペリオル）の総督であったマルクス・カッシアニウス・ラティニウス・ポストゥムスが、260年にローマ帝国から分離して作った短命な国家である（～274）。コロニア・アグリッピナ（現在のケルン）を首都とした。マルクス・ピアウオニウス・ウィクトリヌスは軍人であり、富豪であった母親の資金力によって3代目の皇帝となった。268年に即位し、271年に暗殺された。皇帝冠をつけた右横顔を刻印し、裏面には女神像が刻印されている。この銅貨には上部にハンダ付けの痕跡はない。ウトン国立博物館蔵、展示。

④青銅製ランプ（タイ西部、ポントック遺跡（Pongtuk）出土）（図1-4）

ローマ帝国時代のアレキサンドリアで製作された青銅ランプといわれてきた。蓋にひげもじゃのギリシャ人風の男性の顔が表現され、取っ手は大きく開いた装飾的なものである。1920年代にポントックにある寺院遺跡から出土した。バンコク国立博物館蔵。

インドからの招来品

①回転紋土器（ジャワ西部、バリ北岸、ベトナム中部などから出土するインドの土器）

回転紋土器(rouletted ware)は、紀元ころから1世紀中頃に南インドで作られた土器である。タミール・ナドゥ州アリカメドゥ遺跡でローマ時代のイタリア半島中部アレッツォで作られた土器と共伴している。東南アジアでは、ジャワ西部とバリ北岸（シンガラージャ）からまとまった数が出土しているほか、ベトナム中部、チャキウ遺跡から破片1点が出土している。1世紀ころにすでにインド人が東南アジアに到来し、コロニー的なものを作っていたといわれる。

②ノブド・ウエア（Knobbed ware）（青銅椀）（タイ西部Ban Don That Pet遺跡で出土）

内部底面中央に突起がある。この突起を中心に同心円状の沈線があり、ろくろを使って底部を薄く成形した痕跡と考えられる。ベンガル地方で生産されたと推定される高錫青銅容器、いわゆる佐波理容器である。中央部の突起はないが、高錫青銅椀はこのほかにも西タイ・ラチャブリ県、カオ・チャムック（Khao Jamuk）で発見例がある（Bennet and Glover 1992）。バン・ドン・ター・ペット遺跡の年代については前4世紀とする説があるが、それほど古いものではないであろう。

このようなローマやインドで作られたものが東南アジア各地から出土することから、紀元1～2世紀以後、ローマやインドとの交易が活発化し、その結果、都市形成、国家形成が始まったというのがこれまでの一般的な考え方であった。しかし、これらの遺物が東南アジアに持ち込まれた時期についてはまったく問題が別である

年代の修正

①ローマ製品の持ち込み年代の修正

アントニヌス・ピウス金貨とマルクス・アウレリウス・アントニヌス金貨は、上部になにかをハンダ付けした痕跡が残っている。これはこの部分に管状の金属が付着していた痕跡である。このこ

とは、当初はローマで貨幣として作られ、貿易上の決済手段としての貨幣として、あるいは金地金としてインドに持ち込まれた金貨が、インドで貨幣ではないものに改変されたことを意味する。円形の金属片の上部に管状の金属がついたものは、1世紀～7世紀にインドで流行していたブッラ (bulla) (複数形はブラエ (bullae) という装身具であり、現代の表現ではペンダントトップである。ローマでは2世紀にミントされたとはいえ、いったんインドに運ばれて改造され、オケオに持ち込まれたのは7世紀ころである (新田 2000, 1)。実はオケオ遺跡から金製ブッラが出土している (Malleret 1962, Pl. XL の下左) (図 1-5)。金製円盤の上部に金管をつけたものである。ローマ皇帝の金貨2枚は、これと同じものであった。

ウィクトリヌス銅貨はタイ西部、ウトン郊外にあるコク・チャンディン遺跡 (Khok Chang Din) のヒンドゥー神殿地下から、多数の旭日銀貨 (裏面にはホラガイ紋) および9世紀のアラブ銀貨といっしょに壺の中に収納された状態で一括出土したものである。地鎮用奉獻物として使われたコインであった⁽¹⁾。また、共伴した旭日銀貨と同じタイプの旭日銀貨の古銭学的分析によっても9世紀～10世紀のものとされている (Mahlo 2012, 137)。したがって、ミント年代の3世紀ではなく、9世紀以降にタイ西部に持ち込まれたものである。また、東南アジアから出土したヨーロッパのコインとしては、プノンベンからアレクサンドロス大王のドラクマ銀貨 (Malleret 1962, Pl. XL の上) (図 1-6)、ベトナム北部バヴィ山から東ローマ帝国第2代皇帝・テオドシウス2世 (在位408-450) 銅貨もあり (Malleret 1962, Pl. XL の下右)、前4世紀から後5世紀までの時代の違うコインが持ち込まれていることは、これらのコインがいったんインドに流入して混ぜられ、その後に東南アジアに流入してことを示すだろう。コインのミント年代が即東南アジアの出土遺跡の年代ではない。

アレキサンドリア製ローマンランプ (1世紀) といわれたものも、ローマ帝国時代にアレキサンドリアで作られたものではなく、7～9世紀のビザンチン製品であり、これも持ち込まれたのは7世紀以降である。

同様の事例はベトナム南部ラムドン省カッティエン遺跡 (Cat Tien) のヒンドゥー神殿から出土した銅盤についてもいえる。この銅盤には4人の楽士たちがリュート、フルートなどを演奏している画像が表現されたものであるが (新田 2006, 図 1 d, 2a)、その原型はイラン北部マザンダランで発見された7世紀と推定される銀製椀であり、さらにマザンダラン銀製椀の祖型は5世紀ころのササン朝ペルシャで流行した銀製椀であった。ササン朝ペルシャに起源し、4人の楽士紋を打ち出しによって施したイラン製銀製椀がインドに流入してコピーが作られ、それがカッティエン遺跡に持ち込まれたのであり、その年代は7世紀以降ということになる (新田 2006, 277-278)。

以上のように、東南アジアとローマやオリエントの直接的交渉はなく、インドを經由して、しかも7世紀以降のことであった。

②インド製品の持ち込み年代の遡上

東南アジアから出土する初期のインド製品は回転紋土器 (1世紀)、ガラスや貴石製ビーズ、特に酸で加工されたエッチト・ビーズ (etched beads)、高錫青銅椀 (Bennet and Glover 1992)、象牙製櫛 (タイ中部Chansen出土) (1～3世紀) などがある。これらのインド製品の年代は前3世紀～

後1世紀頃である。タイ西部の出土状況から紀元前からインドとの交渉があったことを推定させる。

都市形成の前提：「インド化」に先立つ人口の集積と域内交易ネットワークの存在

東南アジアには「インド化」に先立って人口集積と広範囲の域内交易ネットワークが築かれていた。タイにおける都市遺跡には、都市形成以前の居住痕跡があるのが一般的である。たとえば、東北タイ中央部、カラシン県、ムアン・ファデー遺跡（Muang Fa Daet）は大型の環濠都市遺跡であるが、環濠に囲まれた内部の北西部に前3世紀の墓地のあるマウンドがある。また、現在の集落がある南東部にも先史時代の居住があった（新田2005、79）。このようなマウンドは一般的な東北タイ先史遺跡の姿であり、都市化以前に人々の居住、つまり集落があったことの証拠である。同様に、ナコンラーチャシーマー県にあるパノム・ワン遺跡（Phanom Wan）では、クメール時代の建造物の下から鉄器時代の墓地が確認されている。パノム・ワン遺跡から出土した碑文のうち、1082年の碑文にはジャヤヴァルマン6世の名があり、この地域がアンコール中央政権の王を輩出したマヒダラプラ（Mahidarapura）王家の根拠地であったことを示しているが、それ以前の鉄器時代から連続した居住がなされていたと推定できる。東北タイの先史時代遺跡の特徴は、雨季の洪水による水没、水害を避けるために基本的には微高地上に居住地を設定することである。その後も同じ微高地上に継続して居住があるのが通例であり、先史時代から歴史時代へ、さらには現代にまで連続したものも多い。

域内交易ネットワークも広く展開していた。タイ西部のウトン、バーンドンターペット遺跡（Ban Don Tha Pet）およびマレー半島東岸のクラ地峡に位置するカオサムケーオ遺跡（Khao Sam Keo）からは、本来はベトナム中部のサーフィン文化域のものである双獣頭形耳飾が出土している。双獣頭形耳飾の石材については、台湾東部花蓮県豊田産のネフライトが南シナ海域に運ばれて加工されたことが近年明らかにされている（飯塚2010、61-62）。サーフィン文化の土器や耳飾は、北は台湾の蘭嶼からベトナム、フィリピン、タイ、マレー半島に至るまで広い空間に広がっており、大陸部と島嶼部との間にも交易ネットワークが存在した。さらにカオサムケーオ遺跡からは東南アジアだけでなく、中国やインドとの交渉があったことを示すものも出土している。中国との関係では前漢鏡、前漢代の銅印、前漢代の印紋陶片、玉製の双魚文垂飾が、インドとの関係では所有者であるインド人の個人名がプラクリット語、ブラーフミー文字で刻まれた石製印章（前1～後1世紀）、種々のガラス・ビーズが出土している（Bellina-Pryce and Silapanth 2006, 281-282; Higham and Thosarat 2012,）。クラ地峡東岸には5世紀初頭から中国に朝貢する頓遜などの扶南の属国であった港市国家が現れる地域であり、すでに先史時代からその萌芽があったことになる。

沿岸部と内陸部の間にも同様な交易ネットワークがすでに先史時代からあった。たとえば、チェンマイ近郊の遺跡で発見された人骨が身につけていたシャコガイ製腕輪や、東北タイのバーン・プラサート遺跡（Ban Prasat）出土人骨が身につけていたシャコガイの腕輪などは、沿岸地域からの遠距離交易の結果内陸部に持ち込まれたものである。青銅器に関しても、前3世紀以降、銅鼓は現物の直接的移動、あるいは鑄造技術やソフトの移転という形をとりながら、ベトナムから大陸部各

地へ、さらにはマレー半島沿岸からインドネシア北岸を経て、はるかモルッカ諸島にまで運ばれている(新田2010, 98-99)。中国的青銅器である銅戈もベトナムで変容された後に、メコン水系をたどってラオス南部、東北タイに動いている。このように東南アジア内部に先史時代からさまざまな物、とくに威信財に類する物が交易ネットワークの上を縦横に動いていた。日常生活に必要な物資、例えば銅、鉄、塩なども、より狭い空間での交易ネットワークにしたがって取引されていた。

このように「インド化」の前に、すでに東南アジア内部に交易ネットワークが張り巡らされ、その結節点に人口集中が生じていたのである。東北タイ、特にムン流域では、大型環濠集落とそれに付随する小型環濠集落あるいは無環濠集落が存在するが、これらの大型環濠集落には相当数の人口があったと推定される。環濠集落が現れる時期について、東北タイ南西部ナコンラーチャーシーマー県ヌンウローク遺跡(Noen U-Loke)の発掘は重要な手掛かりを与える。環濠土手内で検出された炉跡から採取された木炭によって、ヌンウローク遺跡環濠の建設時期は鉄器時代にあることが明らかとなった。さらに、ヌンウローク遺跡の近くにある環濠集落遺跡、バーンノンワット遺跡(Ban Non Wat)でも同様の調査を行い、前1千年紀末ころに環濠と土手が建設されたことがわかった。ハイアムらが調査した環濠集落では後3世紀ころまで建設が続いていたことが解明された(Higham and others 2007, 38-39)。つまり、環濠の掘削は鉄器時代のことであり、環濠都市が一般的になるドヴァーラヴァティー時代よりも早い時代に出現したのである。ドヴァーラヴァティーの都市形成前に人口の集中化が進行していたことは以上から十分に可能性がある。

呉の皇帝・孫権は東南アジアの交易ネットワークの中心となって繁栄していた扶南のことを聞いて、東南アジア貿易のネットワークに参入すべく、朱応と康泰を扶南に派遣する(243年ころ)⁽²⁾。いっぽう『梁書』列伝48・海南伝の記事にあるように、225年に扶南王・范旃は蘇物という人物を天竺に派遣するが、ベンガル湾岸伝いにガンジス河口に至るまでに1年余かかっており、彼を迎えた天竺王は、「海濱極遠猶有此人」と言って驚いている。扶南からインドへ向かうことは稀であったということである。3世紀初めのフナンはインドとの交渉は希薄であった(深見2009)。いっぽうで、西方から東南アジアに渡来するケースはままあった。『梁書』列伝48・海南伝には、「漢桓帝延熹九年、大秦王安敦遣使自日南徼外来献。漢世唯一通焉。其国人行賈、往往至扶南、日南、交趾。其南徼諸国人少有到大秦者。孫権黄武五年有大秦賈人字秦論来到交趾。交趾太守吳邈遣送、詣権。…」とあり、後漢・桓帝の延熹9年(165)に「大秦王安敦の使い」つまりマルクス・アウレリウス・アントニヌスの使者と称する者が日南郡を経て到来したが、漢代にはこれが唯一であり、また呉・黄武5年(226)には秦論という名の「大秦の賈人」つまりローマの商人が交趾に到来した。また、大秦に行く者は少ないとも記している。また、「漢和帝時天竺数遣使贡献」、あるいは「桓帝延熹二年四年頻從日南徼外来献」とあり、インド、ローマあるいはその属領から来航する者はいたが、その逆は稀であったということである。

ベトナム中部ではインドとの関係以前に、中国南部との関係が密接であり、3世紀には三国時代・呉の首都である建業城の瓦葺き建造物と類似する人面瓦がチャキウから出土しており(山形2005, 40-41)、3世紀にはベトナム中部に都市形成の萌芽が起きていた可能性がある。

このことは、インドとの交渉が活発化する以前にすでに東南アジア域内貿易が盛んに行われてい

たことを物語る。インドとの交易活動が即東南アジアの都市を生んだのではなく、その前提としての東南アジア域内交易の活発化と人口集積とがあったのである。東南アジア内部の域内交易ネットワークが、東南アジア外部の交易システムと接続されたときに都市が生まれた。海岸には外部交易ネットワークとの接点として港市が、内陸部には、港市と内陸部の貿易商品産地とを結ぶ交易ルート上の重要地点に都市が誕生する。タイ湾岸では6世紀ころから各地に都市形成が行われた。

中国との関係

「インド化」以前に東南アジア域内での貿易活動が活発に行われていたことを述べたが、あわせて中国との交流も重要であった。表1は漢代から東南アジアの本格的「インド化」が進んだ6世紀中頃の中国への遣使貢献の記録をまとめたものである⁽³⁾。ここから以下のような時代的变化を見ることができる。

第1期は前漢から三国前期である。漢代から呉・黄武5年(226年)までの間に登場する国は大秦、黄支、罽、葉調、天竺である。大秦はローマ帝国、黄支はカンチープラム(インド南東岸タミール・ナドゥ州)、罽はミャンマー南東部タトゥン地域、葉調はスリランカあるいはジャワ、天竺はインドである。葉調がジャワだとしても、ほとんどが東南アジア域外からの来航であり、東南アジア各地の貿易は中国の政治権力、つまり王朝との関係を持つことなく行われていた民間貿易であったと推定できる。

状況が変わるのはその後である。『三国志・呉書』呂岱伝によれば、「又遣従事南宣國化、暨徼外扶南、林邑、堂明諸王、各遣使奉貢」とあり、呂岱が交州刺史であった黄武(226年)～黄龍3年(231年)のいつかに、彼の属官である従事を扶南等へ遣使した。また「又」とあることから、あるいはそれ以前にも遣使していた可能性もある。呂岱の遣使に対する反応が扶南、林邑、堂明諸国の遣使奉貢であった。呉が地方官である従事職の朱応と中央官僚である中郎職の康泰を扶南に派遣するのはその後であり、これによって初めて東南アジア側の対中国政権との公式な関係が生じたと考えてよい。243年に扶南王が呉に、また晋成立後の268年に扶南、林邑が遣使して以降は東南アジア諸国からの中国王朝への遣使朝貢が繰り返されるようになる。朱応と康泰の扶南派遣を画期とした東南アジアと中国との公式関係の始まり、これを第2期としよう。

第3期は南朝・宋の成立以降である。宋代以降になると、林邑と扶南がたびたび遣使するほか、マレー半島東岸の諸国(盤盤、干陁利、狼牙脩)、ジャワの諸国(呵羅陁、呵羅単、槃皇、闍婆婆達、槃達)、スマトラ(蘇摩黎)、バリ(婆利)など、東南アジアのスンダ海域、ジャワ海域の諸国からも遣使が相次ぐ。

これらの記事中、宋文帝・元嘉7年(430年)の呵羅陁国および齊武帝・永明2年(484年)の扶南国からの遣使の記事は注目すべきものである。前者は遣使奉表し、表のなかで次のように述べる。「今軫衰弱、隣国競侵。伏願聖王、遠垂覆護並市易往反、不為禁閉、若見哀念、願時遣環、令此諸国、不見輕侮。亦令大王名声普聞、扶危救弱、……。願勅広州時、遣舶還、不令所在有所陵奪……」とあり「隣国が競って我が国を侵すので、宋に我が国を守ってほしい。また貿易が円滑に行われるように守ってほしい。広州へ送った貿易船が戻ってこないの、その安全を保証してほしい。」とうっ

たえている。この表の文言の背景には、中国・広州と東南アジア各地を結ぶ貿易が活発に行われており、各国が互いに競争、妨害行為を行っていたことがあり、宋の実力により貿易の安全保障を求めたものである。後者は林邑のライヴァル、扶南が同様の要請を斉に対して行ったもので、天竺道人・釈那加仙を使者として以下のことを上表した。「前遣使齋雜物、行広州貨易、天竺道人釈那加仙、於広州因附臣舶来扶南、海中風漂、到林邑。国王奪臣貨易並那加仙私財……。伏願遣軍将、伐凶逆、臣亦自効微誠、助朝廷撲使辺海諸国、一時帰伏。……」とあり、「前回、遣使し、広州に行って貿易をしたさいに、インド人の釈那加仙が広州から扶南王の舟に乗り、自分の貨物を積載して扶南に来ようとしたところ、風のために林邑に漂着。林邑王は貨物と私財を奪ったので、その復讐のために林邑に対する斉の軍事力行使を要請」した。

このように東南アジア海域での中国王朝のプレゼンスによる秩序維持を東南アジア諸国が期待するような状況になっている。自国の安全保障と貿易の秩序維持を中国王朝にもとめる状況が生じてくる帰結として、中国の冊封体制のなかに自国を位置づけようとする動きがでてくる。当初は派遣された使者に対する中国の官職の授与として現れる。たとえば、宋武帝・孝建2年（454年）の林邑王・范陽邁の使者は長史・范龍跋が揚武將軍に叙されたことである。揚武將軍は四品官の雜号將軍である。同様に孝建3年（455年）の罽皇国の使者、長史・竺那槃智に対して四品官の振威將軍号を、泰始2年（466年）には罽皇国の使者、長史・竺須羅達と前使者の竺那槃智に四品官の龍驤將軍号を、天竺迦毗羅国の使者、竺扶と大竺阿彌にも四品官の建威將軍号を与えている。

さらに遣使した王に対して爵号を叙することになる。斉武帝・永明9年（491年）、篡奪して林邑王となった范当根純林に持節都督縁海諸軍事安南將軍林邑王を、范当根純林を倒して林邑王になった范諸農（范陽邁の子孫）にも同じ爵号が与えられた。安南將軍は三品官である。これは軍隊指揮権（持節都督）、軍事行政支配権（縁海諸軍事）、軍隊階級（安南將軍）、林邑国所有権（林邑王）を斉が公式に認めたものである。林邑王・范諸農は建武2年（495年）に二品官の鎮南將軍に進号しているが、永泰元年（498年）の范諸農死後は代々、仮節都督縁海軍事安南將軍林邑王となった。鎮南將軍は二品官だが安南將軍は三品官のため降格であるが、「持節」から「仮節」も降格である⁽⁴⁾。また「諸軍事」から「軍事」となっており、これもいわば降格である。林邑のライヴァル、扶南は林邑に遅れること19年、梁武帝・天監9年（510年）に持節都督縁海諸軍事安南將軍扶南王に叙された。將軍号では林邑と扶南は同格となったが、扶南のほうがやや上位である。梁の林邑と扶南に対するバランス感覚であろう。倭の五王が百済と競合していたのと同じように、林邑と扶南が競合していたことを物語る爵号である⁽⁵⁾。

ところが、同年、林邑王は持節都督縁海諸軍事威南將軍林邑王に叙されたが、威南將軍は五品官であり、一挙に降格、普通7年（526年）には林邑王・高式勝鎧が遣使するが、このときにも五品官の持節都督縁海諸軍事綏南將軍とされた。同じ五品官であるが、綏南將軍は威南將軍よりも下位であり、さらに降下した。中大通2年（530年）の高式律陁跋摩に対しても同じ爵号が与えられた。扶南の叙爵にともない、林邑王の爵号が一挙に下降した原因は記録がなく、想像によるしかない。おそらく、林邑がたびたび中国領であったベトナム北部を侵すことから、その牽制のために扶南を

使ったのであろう。

ドヴァーラヴァティー出現以前の東南アジア海域では、海上貿易活動の活発な動きが展開していたとともに、中国王朝の権威を背景とした政治的、外交的活動も展開していたのである。

都市の形成：ドヴァーラヴァティーの都市

東南アジア沿岸地域には多くの港市が生まれるが、内陸部にまで多くの都市が展開しているのがドヴァーラヴァティーの都市である。ドヴァーラヴァティーとはサンスクリット語で「港への通路」という意味である (Saraya 1999, 50)。名前自体がすでに海上貿易との深い関係があることを示している。ドヴァーラヴァティーの考古学的調査・研究はクアリッチ=ウェイルズ (Quaritch Wales 1966)、デュポン (Dupont 2006)、ボワスリエ (Boisselier 1972) らによって先駆的に始められた。それ以前は、漢文史料しか手がかりがなかった。近年、シーサク、ティダおよびパスックらタイ人研究者による研究成果が発表されている (Vallibhotama 1986, Saraya 1999, Indrawoath 1999, 2004)。また、新田による都市プランの研究 (新田 2005)、概説 (新田 2013) がある。

ドヴァーラヴァティーについての中国史料のなかの記事は『新唐書』の記事が詳細であり、文献からは「投和」(『太平御覧』巻788、『通典』巻188、『新唐書』巻222)、「頭和」(『陳書』本紀第6公主紀)、「墮和羅」(『旧唐書』巻197、『新唐書』巻222訶陵伝下)、「墮羅鉢底」(『旧唐書』真臘伝、『唐会要』巻99、『大唐西域記』巻10)、「杜和羅鉢底」(『南海寄帰内法伝』巻1、『大唐求法高僧伝』巻上大乗灯禅師)などの表記で現れる。

ドヴァーラヴァティーの都市形成の要因はどのようなものであったのか。その地理的要因は重要である。カオサムケオ遺跡の状況が示すように、クラ地峡においてはすでに前1世紀にはインドとの交流があった。インドからの移民とガラス・ビーズ製作技術の移転である。インドとの海上貿易の通路は、後のマラッカ海峡経由ではなく、マレー半島横断ルート、なかでも最も狭いクラ地峡ルートが重要であった。このルートをとると、インドから来る場合には東岸で舟を下り、陸路でクラ地峡を横断し、西岸で再び舟に乗ってタイ湾、南シナ海域に入ることになる。その場合はタイ湾岸が最も近い地域となる。その結果タイ湾岸に貿易拠点が形成されることになった。インドとの貿易活動の活発化に伴いマレー半島北東岸からタイ湾沿岸地域にいくつもの港市ができ、それらの中の有力港市や都市が国家形成を行い、都市連合の国家になったものがドヴァーラヴァティーである。

ドヴァーラヴァティーに関連して『日本書紀』記事中の7世紀中頃の2件の漂着記事が注意される。それらは、「(白雉五年)夏四月、吐火羅國男二人・女二人、舍衛女一人、被風流來于日向」と「(斉明)三年秋七月丁亥朔己丑、觀貨邏國男二人女四人、漂泊于筑紫。言、臣等初漂泊于海見嶋。乃以驛召。辛丑、作須彌山像於飛鳥寺西。且設盂蘭盆會。暮饗觀貨邏人。或本云、墮羅人。」(下線は筆者)である。「吐火羅國」、「觀貨邏國」については一般的には鹿児島県トカラ列島のこととされるが、白雉五年条に「舍衛女」もいっしょに漂着していることは、「舍衛」がインド中部のかつてのコーサラ国王都のことであるので、「吐火羅國」、「觀貨邏國」をトカラ列島とすると、この記事の理解が難しい。中央アジアのトカラ(トハラ)であるとの説もあるが、中央アジアの人々がインド人と同舟するということも考えにくい。また斉明三年の記事にある或本では「墮羅人」とあり、

これは中国史料中のドヴァーラヴァティーの漢字表記と共通する。また飛鳥寺の西に須彌山を作って、孟蘭盆会のさいに彼らを供応したというのは、観貨邏人が、仏教が盛んに信仰されたドヴァーラヴァティーの人々であることが前提となろう。むしろこれはドヴァーラヴァティーと理解すれば、ドヴァーラヴァティー人（つまりモン人）とインド人が同舟していたことの意味がよく理解できる。そうであればドヴァーラヴァティー自身も海上貿易に従事していたことがうかがえる。

『新唐書』にはドヴァーラヴァティーについて以下のように記しており、ある程度の情報を得ることができる。

「投和在真臘南、自広州西南海行百日乃至。王姓投和羅、名脯邪迄遥。官有朝請將軍、功曹、主簿、贊理、贊府。分領国事。分州郡縣三等。州有參軍、郡有金威將軍、縣有城、有局長。官得選僚属自助民。居率樓閣畫壁。王宿衛百人。衣朝霞、耳金鑲金縷、被頸宝飾、革履。頻盜者死、次穿耳及頰。而斲其髮。盜鑄者截手。無賦税。民以地多少自輸。王以農商自業。銀作錢、類榆莢。民乘象及馬、無鞍、鞵繩穿頰、御之。親喪断髮、為孝。焚屍、斂灰于甕、沈之水。貞觀中、遣使、以黄金函内表弁獻方物。」

日本語訳すると以下ようになる。

「投和は真臘の南に位置する。広州から西南方向に海路で行くこと百日で投和に至る。王の姓は投和羅、名は脯邪迄遥という。役人としては、朝請將軍、功曹、主簿、贊理、贊府がある。それぞれ分担して国事を領する。国内は州、郡、県の3等級に分かれる。州には參軍という役職があり、郡には金威將軍、県には城と局長とがいる。役人は選抜されて就任し、民を助ける。彼ら役人は高くて壁画に裝飾のある建物にいる。王宮は100人の兵で守備されている。王の衣類は朝霞という衣服で、耳には金鑲金縷をつけ、首には宝石を飾り、革製の履物を履いている。盗みをしばしば行う者は死刑に処せられる。その次の罰は耳と頰に穴をあけ、その頭髪を剃る。贗金作り犯は手を切断する刑に処せられる。税金はない。民は自分の農地からの収穫物を商売する。王は農業や商業を行って、みずからの生業としている。銭は銀錢で、中国の榆莢に似ている。民は象や馬に乗るが、鞍はなく、手綱は頰に穴を開けてとおし、これでもって御する。親が亡くなると頭髪を切るが、こうすることで親孝行となる。遺体は火葬にし、その遺灰は甕に集め、水中に沈める。貞觀年中に唐朝に遣使し、黄金の箱の中に表を入れ、方物を献じた。」

文献からは商業が活発に行われ、官僚制、地方行政制度、貨幣制度等のある国家であったことがうかがえる。ただし、貨幣制度の存在については疑問があり、貿易決済手段として特化した旭日銀貨を誤認したものであろう（新田2013, 29）。

考古資料からはつぎのようなことが明らかになる。

有力都市は城壁と環濠で都市を囲み、内部に王宮を築いた。レンガ造りの仏塔を建立してその周囲にセーマ石を立て、法輪をその前に立て、独特の風貌の仏像を祀った。都市エリートは仏教を信仰した。例えば、マレー半島西岸のラップリにあるリシ洞穴（Tham Rishi）壁面に彫られた仏像の両足首の間にあるサンスクリット碑文には「徳を積むことによって清められたプラ・シュリー・スマディ・グプタ」（punkaramajra srimadhigupta）という寄進者の名がある（Saraya 1999, 74）。プラ・シュリー・スマディ・グプタはこの地のエリートであっただろう。西タイ沿岸地域には6世紀ころ

からクブア (Kubua) (タイ芸術局1996)、ウトンなどの都市が栄え (図2-1)、城内外にレンガつくりの仏塔を建立し、銀貨を納めた壺を宗教施設の基壇下に埋めた。仏教が主要な信仰とはいえ、ヒンドゥー教、大乘仏教も同時に信仰されていたことを示す考古資料も多い。例えば、ウトンでは城内南部からシヴァの顔のついた石製ムカ・リングが出土しているほか、7世紀とされる銅版文書が出土しており、この銅版文書にはパッラヴァ文字により、イーシャナヴァルマン王の孫・ハルシャヴァマンが宝石をつけた駕籠、日傘、楽器をシヴァ・リングに捧げたことを記している (Indrawoath 1999,138,Saraya1999,26,76,タイ芸術局2004,52-53)。前述のウトン南西郊外にあるコク・チャンディン遺跡でもリングとヨニが出土しており (タイ芸術局2007,104-105)、シヴァを祀る神殿である。

このようなヒンドゥーの痕跡を残す都市は、ウトン以外にもある。シーテープ (Sri Thep) からはヴィシュヌ、シヴァ、クリシュナほか多くのヒンドゥー神像が出土している (タイ芸術局1999)。またタイ湾東岸のドン・シー・マホソット (Don Sri Mahosot) でもヒンドゥー神殿のほか壁面に動物などのレリーフを彫刻した貯水タンクがあり、ここでも仏教の他にヒンドゥー教も信仰されていた。また、8世紀以降になると大乘仏教の影響も現われ (Vallibhotama 1986,231)、ナコンチャイシでは6本の牙を持った象 (観音菩薩の化身) のジャータカのシーンを表現したレリーフの出土もある (タイ芸術局1999,95)。

7世紀にはバンコク西方のタチン川流域に大規模な都市、ナコンチャイシ (今のナコンパトム) が栄えた (図2-2)。ナコンパトムのネルン・ヒン (Nern Hin) にあるフアイ・チョラカイ (Huay Chorakay) の仏塔の下から1964年に発見された「sridvaravatisubarnapunya」(ドヴァーラヴァティーの王の功德) とのパッラヴァ文字による銘文をもつ銀貨2点が出土している (Boeles 1964, 100-103)。またウトンでも同年に同じ銘文をもつ銀貨が1点出土した (Boisselier, J. 1972,52)。現在までにバンクームアン (Ban Khu Muang) などからも出土している。この銘文によりドヴァーラヴァティーという国の実在が証明されたが、さらにウトンの北東1kmにあるバンコーク (Ban Khok) から出土した別の銀貨 (裏面にホラガイ紋) にはラヴァプura (Lavapura) という銘文が2行にわたって書かれていた (Boisselier, J. 1972,52)。「pura」とは「町」の意味であり、「Lavapura」とはタイ中部、チャオプラヤー流域にあるラヴォー (Lavo)、現在のロップブリー (Lopburi) のことであるが、文字どおり都市が形成されていたことを証明する銘文である。都市と初期国家が形成されていたことは、これらの銀貨銘文で明らかである。ドヴァーラヴァティーでは『新唐書』記事中にあるように円形の銀貨が流通していたが、これが表面にシュリーヴァッサ紋。裏面に旭日紋をもったいわゆる旭日銀貨である。ミャンマーで最初にミントされ、タイ、カンボジア、ベトナム南部に広がったが、ドヴァーラヴァティーではそのほとんどが9世紀以降とされる (Mahlo 2012)。パンチによる製作だが、タイではチャイナットなどでは旭日銀貨鑄造用の石製鑄型も発見されており⁽⁶⁾ (伊東2001, 215, 図4)、稀に鑄造品もある。沿岸部の都市からの出土であり、また鑄型には1個あるいは2個しか彫り込まれていないので、貨幣経済に必要な大量生産されたものではなく、貿易決済用に特化したものと考えられる。

バンコク東方のナコンナヨク市にある円形環濠遺跡ムアン・ドンラコン遺跡 (Muang Dong

Lakhon) の発掘では、レンガを積み上げた壁で囲んだ宗教施設と考えられる遺構が出土し、奉獻物である金葉や、金銅製仏像の頭部などが出土しており、仏教信仰を伴う集団の居住があったことを示している (タイ芸術局 1993)。

タイ湾東岸にも大環濠都市遺跡ドン・シー・マホソット (図 2-3) を初め、多くのドヴァーラヴァティー都市が立地する。サモラコット遺跡 (Sa Morakot) では両足裏の土踏まずに法輪を彫刻した仏足が彫られ (図 2-4)、部派仏教の信仰が 1 世紀ころから栄えた。当時の交易ネットワークの上に次々とドヴァーラヴァティーの都市が建設されていった。いずれも大規模な城壁と環濠、宗教建造物を持ち、その背景として富の蓄積があった。

都市による富の蓄積は沿岸部の諸都市に限らず、内陸部の都市でも生じた現象であった。中部タイと東北タイとを結ぶルート上に立地するシーテープはそれ自体広大な面積を幅広の環濠で囲んだ大きな都市である (図 3-1)。パサク川に流入する多くの支流がそばを流れており、河川交通の重要地点に立地し、中部タイから東北タイへ入る重要拠点である。初めは円形の環濠と土塁で都市を囲んだが、ラヴォーと同様の人口増加のために、東側に長方形の拡張部分を作っている。円形城内中央にレンガ造り仏塔と石製法輪がある。仏塔基壇にはストゥッコ像がよく残っている。シーテープ遺跡からはドヴァーラヴァティー以前の鉄器時代の遺構が検出されており、鉄器時代以来、居住が継続していた。シーテープの北西郊外には、近年全体が発掘され、修復整備された巨大な仏塔遺跡、カオ克蘭ノック (Khao Klang Nok) が建設された (図 3-2)。この仏塔は一辺 100m ほどのラテライトによる 3 段の正方形基壇の上にボロブドゥールの仏塔のような巨大な釣鐘形をしたレンガ作りの頂部をのせたものである。このような巨大な宗教施設を建設できるだけの富が蓄積されていたのである。このようなレンガやラテライト作りの方形基壇仏塔は、ウトン、クブア、トゥン・セッティ (Thung Setthii) (ペチャブリ県) (タイ芸術局 2000)、ナコンチャイシ、ロブリー、シーテープ、ムアン・ファデーなどドヴァーラヴァティーの多くの都市でみられる。

ドヴァーラヴァティーの文化はタイ湾岸からチャオプラヤー流域、さらに山間部を經由して東北タイへと広がった。東北タイ南部のムン流域には多数の環濠遺跡が残るが、それらの多くには内部からドヴァーラヴァティー時代の土器、セーマ (境界石)、石製磨棒と石臼が散布している。なかでも東北タイの真ん中、カラシン県ムアン・ファデー遺跡 (図 2-5) はひじょうに大形の環濠都市遺跡で、内部には仏塔と東北タイ特有のジャータカのシーンをレリーフとしたセーマが多数出土している。9 世紀には北タイ (今のラムプン) にハリブンチャイ王国ができ、モン族の国家が成立した (Indrawoath et al. 1993)。

ラオスにおけるドヴァーラヴァティー文化の波及についてはこれまで解明されていなかったが、メコンを越え、メコン東岸にまで達していることが新田による現地調査によって近年明らかになった。ウィエンチャン北郊、バーン・ナーニャ (Ban Na Nga) にあるワット・ダンスン・ナーニャ寺院周辺にはドヴァーラヴァティー様式のセーマと仏像があり、ラオス中部、サワナケート郊外のバーン・ナムアン (Ban Na Muang)、バーン・シーカイ (Ban Si Khai)、バーン・カーン (Ban Khan) では仏塔と花生けを彫刻したセーマが多数発見されている (図 4-4, 5)。この種のセーマは東北タ

イにもみられ、ドヴァーラヴァティー様式のセーマであり (Na Paknam 1981, 60-62, Pl.17,18,46)、東北タイからメコン東岸に伝わったことを示している。またサワンナケート北郊外、サイブリー郡バーン・ファトン (Ban Phua Tong) では、環濠で囲まれた遺跡から、独特の風貌をした3人の人物浮き彫り像のついた蓋をもつ金製小箱や金製クンディ等 (図4-1,2) が出土したほか、環濠内には仏塔レリーフのあるセーマ (図4-3) やラック・ムアンのような石柱が出土している (2010年1月に新田が現地調査)。メコン沿いの交通運輸の拠点には明らかにドヴァーラヴァティー文化が到達していたのである。

ドヴァーラヴァティーの都市には、沿岸部の都市と内陸部の都市とで、都市プランに顕著な違いが見られる。沿岸部の都市プランは、クブアに代表されるように、正確な方形ではないが、方形プランを都市のモデルとするのに対し、内陸部の都市では自然地形に応じた不整形プランであることがふつうである。方形プランと自然地形プランとの違いは、都市形成の歴史が違うことに原因がある。前者は、方形プランを都市の理想形とするインドの都市思想の影響を受けたものであり、後者は先史時代以来の自然地形に順応して居住地を形成してきた在来村落が交易の発展とともに都市化したものである。自然地形順応プランの都市も、シーテープやムアン・セーマ (図2-6)、あるいはムアン・ファデーのように、おそらく人口増加による都市の拡大に伴う都市領域の拡張に際しては、新しい都市プランである方形プランを適用して、拡張部分は方形を希求したプランとなっている (新田2005)。

ドヴァーラヴァティーの都市には上記のように3つの都市モデルがある。「インド化」以前の域内交易による人口集積から発展した、いわば「農村発展型都市モデル」と、沿岸部に多くみられるような「インド化」による内陸交易ネットワークと外世界の接点に突如出現した「突如出現型都市モデル」、および農村発展型が人口増加の結果拡張された「農村発展拡張型都市モデル」である。

「農村発展型」は交易商品である森林産物等の供給地として、「突如出現型」はインドに代表される海外貿易の窓口および文化の流入口として、「農村発展拡張型」は前2者を結びつけるネットワークの結節点として機能を果たしていた。

農村発展型のばあい、本来の農村の構造をとどめていたと考えられる。典型例がマハーサーラカム県、バーン・チェンヒアン遺跡である (図3-3)。この遺跡は環濠で囲み、内部からはドヴァーラヴァティー時代の土器、セーマ、石臼・磨棒などが出土しており、ドヴァーラヴァティー文化が浸透していた集落であるが、自然地形のままである。東北タイに一般的な農村がそうであるように、環濠内部のマウンド中央に居住域を、その周辺部に菜園や墓地を配置した構造である。特別な宇宙観によって建設されたことを推定させるものはない。このことは、タイ内陸に固有の「バーン」がそのままの形で維持され、自給的農村の姿を投影したものである。

突如出現型は、方形を希求して建設されたことが明らかであり、古代インドの都市の理想形について論じた『アルタシャーストラ』に表わされた都市の理想形としての方形プランがその根源であった。しかし、ドヴァーラヴァティーの「突如出現型都市モデル」は、その理想形とはいささか異なり、環濠の内部の中央に近いところに王宮を配置し、環濠の内側だけでなく、外側にも宗教施設を配置

させる。正方形プランで、3 km四方の濠と城壁で囲み、中央に中心寺院バイヨンを設置し、その北西に王宮を配したアンコール・トム（図3-4）を典型例として、『アルタシャーストラ』が論じたような、都市中央に中心寺院を、その北西に王宮を置き、同心円状に内側から外側へ向かって、重要なものから、より重要さが低くなるものが配置されたわけではなかった。またインドの方形都市プランの影響をうけつつも、徹底した方形プランや建物配置はとっていない。ドヴァーラヴァティー都市の姿は特別な宇宙観に拘束されない、生活密着型宇宙観によって建設されたともいえるべきものであった。9世紀以降に成立するヒンドゥーの宇宙観を都市化したクメール都市はすべてきわめて厳格な方形規格プランの都市である。例えば、西タイのムアン・シン（図3-5）、北タイのスコータイ（図3-6）⁷⁾、東北タイのサコンナコン（図3-7）などはそうである。

6. まとめ

従来考えられていたよりも古くから東南アジアとインドとの間には、ものの動きがあった。インドとの交易の活発化が都市形成の契機になったことにはまちがいはない。しかし、その前提として、東南アジアでは遅くとも前3世紀までには域内交易ネットワークが形成され、威信財的「もの」がその上を縦横に移動していた。その結節点には人口集中が生じていた。東南アジア域内交易ネットワークが、中国やインドへつながる域外交易ネットワークと接続されたときに、人口集積がいきなり都市へと変貌していった。

ドヴァーラヴァティーの都市を検討すると、東南アジアの都市形成には2つのモデルがある。第1のモデルは「インド化」以前の域内交易による人口集積から発展した都市、第2のモデルは沿岸部に見られる、内陸交易ネットワークと外世界の接点に突如出現したインド型都市である。

東南アジアの都市形成は、生産活動の拡大と域内交易の活発化によって人口集積が行われていた第一段階を経て、モンスーン利用ベンガル湾横断航路が利用されるようになった4～7世紀に、インドとの交易活動の活発化と、交易商品の効率的集荷システムの構築のために、沿岸各地に都市形成がなされた第2段階を経て、現在残っているような都市遺跡が形成されたといえる。

本論は、平成21～24年度科学研究費補助金（基盤A）（21242028）による研究「東南アジア古代・中世考古学の創生」（研究代表者：新田栄治）の研究成果の一部である。

図版作成にあたり、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの寒川朋枝氏のご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

注

1. ウトン国立博物館蔵、展示資料。
2. 朱応と康泰の遣使年については諸説ある。桜井由躬雄説では243年ころ（桜井2001,112）、生田滋説では229年（生田・石澤2009,116）、陳顥泗説では244-47年（陳1988,112）。渡部武説では243-252年（渡部1985,12）。和田圭子説は229年（和田1983,229）。呂岱による扶南遣使（黄武5～黄龍3）と孫權による朱応・

康泰の扶南遣使は別とし、陳、渡部のいうように、呉の扶南遣使を複数回とする見解が正しいと考えるので、243年ころとしておく。

3. 表の作成には正史のほかに、龔与・陳雨石・洪炯坤主編 1992も参照した。この書は、堯舜禹の時代から、清代1909年（大隈重信から宣統帝への『日本開国50年史』の贈呈）までの諸外国から中国への贈呈品を年次順に抜き書きしたものである。
4. 軍隊指揮権を表す「持節」は無官の者を死刑にできる権限を持つが、「仮説」は軍令違反者を死刑にできる権限を持つ。「持節」のほうが「仮節」よりも上である。「使持節」は「持節」より上位であり、軍事以外のことでも2千石以下の官吏を死刑にできる権限を持つ。
5. ちなみに、倭の五王の爵号は以下のとおり。2代目・珍は安東將軍倭国王。3代目・濟は当初は安東將軍倭国王、その後、使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東將軍倭国王。4代目・興は安東將軍。5代目・武は使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事安東大將軍倭国王。武は後に梁により鎮東大將軍、さらに天監元年（502年）に征東將軍とされた。また、珍の遣使貢献のさいに、臣下ら13名に平西、征虜、冠軍、輔国などの將軍号を与えたが、平西將軍は四平將軍のひとつで、四安將軍である安東將軍よりは下位であるが、同じ三品官の高位の將軍号である。東南アジア・インド諸国の使者が得た將軍号、揚武、振威、龍驤、建威將軍が四品官であるのに対し、征虜、冠軍、輔国將軍は三品官の高位の雑号將軍である。王と臣下に授与された爵号からみると、宋は東南アジアよりも東アジアのほうを重視していたことになる。なお、天監元年には武とともに、高句麗王は車騎將軍から車騎大將軍へ、百濟王は鎮東大將軍から征東大將軍へ進号した。よって、東アジアでは第一位が高句麗、以下、百濟、倭の序列であった（『梁書』武帝紀卷2）。
6. 伊東利勝氏よりの個人的情報。
7. スコータイ王朝の王城の北側に、それよりも小形の方形都市遺跡プラパーイルワンなどが残っている。これがクメール時代のスコータイである。スコータイにはスコータイ王朝成立後にもかなりの数のクメール語碑文が残るが（吉川2011）、相当数のクメール語を話す人々がいたことが推定できる。

参考文献

- 飯塚義之2010 台湾産玉（ネフライト）の拡散と東南アジアの先史文化。菊池誠一・阿部百里子編『海の道と考古学—インドシナ半島から日本へ—』51-65. 高志書院。
- 生田 滋・石澤良昭 2009 『世界の歴史 13—東南アジアの伝統と発展—』中央公論社（1998年初版）。
- 伊東利勝2001 綿布と旭日銀貨—ピュー、ドゥヴァーラヴァティー、扶南—。『岩波講座 東南アジア史』第1巻、199-226、岩波書店。
- 龔与・陳雨石・洪炯坤主編 1992 『中国貢品大観』上海社会科学出版社、上海。
- 桜井由躬雄2001 南海交易ネットワークの成立。『岩波講座 東南アジア史』第1巻、113-146、岩波書店。
- 陳 顥泗1988 朱応、康泰が使節として扶南へ出た年代について。「東南アジア 歴史と文化」17、107-114。
- 新田栄治1996 ブッダとシヴァの都市 金関恕・川西宏幸編『都市と文明』講座・文明と環境 第4巻、121-136、朝倉書店
- 新田栄治 2000 オケオ出土のローマ金貨を考える。「考古学ジャーナル」454, 1.
- 新田栄治2005 ドヴァーラヴァティーの都市と構造。「東南アジア考古学会研究報告」第3号、73-93。
- 新田栄治2006 東南アジアのヒンドゥー小政体と古代国家—カッティエンとインド、イランを結ぶ道—。鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会『Archaeology from the South』275-287, 鹿児島大学考古学研究室、鹿児島。

- 新田栄治2010 銅鼓の起源と流通. 菊池誠一・阿部百里子編『海の道と考古学 - インドシナ半島から日本へ - 』91-107、高志書院。
- 新田栄治2013 タイー先史から古代・中世へ。新田編『東南アジア古代・中世考古学の創生』9-56。鹿児島大学法文学部比較考古学研究室、鹿児島。
- 深見純生2009 混填と蘇物－扶南国家形成の再検討－。「国際文化論叢」第39号、7-18。
- 山形眞理子2005 林邑の都城。「東南アジア考古学会研究報告」第3号、33-52。
- 吉川利治2011 スコータイに対するクメールの影響－遺跡と刻文に関する分析－。「カンボジアの文化復興」第26号、5-30。
- 和田圭子 1983 東西交渉史論－朱応、康泰の扶南遣使について－。「鹿児島大学史録」16、17-46。
- 渡部 武 1985 朱應・康泰の扶南見聞録本稿－三國呉の遣カンボジア使節の記録の復原。「東海大学紀要文学部」43、7-28。
- タイ芸術局編 1993 『ナコンナヨク県ナコンナヨク市ムアン・ドンラコン発掘調査報告書』タイ芸術局、バンコク。(タイ語)
- タイ芸術局編 1996 『クプア－近隣地域におけるドヴァーラヴァティーの社会集団関係－』タイ芸術局、バンコク。(タイ語)
- タイ芸術局編 1999 『シーテープ歴史公園』タイ芸術局、バンコク。(タイ語)
- タイ芸術局編 1999 『プラバトム・チェディ国立博物館』タイ芸術局、バンコク。(タイ語)
- タイ芸術局編 2007 『ウトン国立博物館』タイ芸術局、バンコク。(タイ語)
- Bellina, Bérénice and Ian Glover 2004 The Archaeology of Early Contact with India and the Mediterranean World, from the Fourth Century BC to the Fourth Century AD. I.Golover ed. *Southeast Asia – From prehistory to history*. 68-88, RoutledgeCurzon, London.
- Bellina-Pryce, Bérénice and Silapanth, Praon 2006 Weaving cultural identities on trans-Asiatic networks: Upper Thai-Malay Peninsular – an early socio-political landscape-. BEFEO, 93, 257-295.
- Bennet, A. and I.Glover 1992 Decorated High-tin Bronze Bowls from Thailand's Prehistory. *Southeast Asian Archaeology* 1990, 187-208, Centre for South East Asian Studies University of Hull.
- Boeles, J.J. 1964 The King of Dvaravati and His Regalia. *Journal of the Siam Society*, 52, Pt.1, 100-103.
- Boisselier, J. 1972 Travaux de la Mission Archéologique Française en Thaïlande. *Arts Asiatiques*, 25, 27-90.
- Coedès, G. 1968 *The Indianized States of Southeast Asia*. University of Hawaii Press, Honolulu.
- Dupont, P. 2006 *The Archaeology of the Mons of Dvāravatī*. (translated with updates, additional figures and plans by Joyanto K.Sen) , White Lotus, Bangkok. (1959 *L'Archéologie Mône de Dvāravatī*. Paris.)
- Glover, Ian C. 1996 The Archaeological Evidence for Early Trade between India and Southeast Asia J.Reade ed. *The Indian Ocean in Antiquity*. 365-400, Kegan Paul International, London and New York.
- Higham, C., A.Kijingam and S.Talbot eds. 2007 *The Origins of the Civilization of Angkor. Vol.II, The Excavation of Noen U-Loke and Non Muang Kao*. The Thai Fine Arts Department, Bangkok.
- Higham, C. and R. Thosarat 2012 *Early Thailand-From Early Prehisory to Sukhothai-*. River Books, Bangkok
- Indrawooth, Pasook, 1999 *Dvāravatī – A critical study based on archaeological evidence-*. Bangkok.
- Indrawooth, Pasook 2004 The Archaeology of Early Buddhist Kingdoms of Thailand. I.Golover ed. *Southeast Asia – From prehistory to history*. 120-148, RoutledgeCurzon, London.
- Indrawooth, Pasook, Krabuansang, S., and Nagwek, P. 1993 *A Study on the Ancient Civilization in the Old Lumphun Town prior to the Mid 13th Century based on the Archaeological Evidence*. Department of Archaeology, Silpakorn

University

Malleret, Louis 1962 *L'Archéologie du Delta du Mékong*. T.3, EFEO, Paris.Mahlo, Dietrich 2012 *The Early Coins of Myanmar (Burma) –Messengers from the Past-*. White Lotus, Bangkok.Na Paknam, No 1981 *The Buddhist Boundary Markers of Thailand*. Muang Boran, Bangkok.Quaritch Wales, H.G. 1966 *Dvaravati : The Earliest Kingdom of Siam 6th to 11th Century A.D.* Bernard Quaritch, London.Saraya, Dhida 1999 *(Sri) Dvaravati – The Initial Phase of Siam's History*; Muang Boran, Bangkok.Vallibhotama, Srisakra 1986 *Political and Cultural Continuities at Dvaravati Sites*. Mar, David G. and Milner, A.C eds. *Southeast Asia in the 9th to 14th Centuries*. 229-238. Institute of Southeast Asian Studies, Singapore.

表1 漢魏晋南北朝時代の西南夷、南夷の中国王朝への遣使貢献 (新田作成)

年	西暦	文献	奉献国	奉献者	奉献物	備考
前漢武帝・元封3	前108	別国洞冥記(後漢)	大秦(ローマ)		花蹄牛	
前漢平帝・元始2	2	漢書・平帝紀	黄支(カーンチープラム)		犀牛(サイのこと)	
後漢和帝	89 ~ 105	梁書・諸夷列伝	天竺		遣使貢献	
後漢安帝・永寧元年	120	後漢書・南蛮西南夷列伝	掸	掸国王・雍由調	楽人、幻人(自称して海西人つまり大秦人)	
後漢順帝・永建6	131	後漢書・順帝紀	葉調		遣使	
後漢順帝・永建6	131	後漢書・順帝紀	掸		遣使	
後漢桓帝・延熹2	159	後漢書・桓帝紀	天竺			
後漢桓帝・延熹9	166	後漢書・西域伝	大秦	大秦王・安敦	象牙、犀角、タイマイ	海路来貢、初めて
呉孫権・黄武5	226	梁書・諸夷列伝	大秦			賈人・秦論が来航
呉孫権・黄武5 ~ 黄龍3	226 ~ 231	三国志・呉書・呂岱伝	扶南、林邑、堂明			呂岱の遣使に対応?
呉孫権・黄龍元年	229	呉曆(太平御覧・卷808所引)	扶南諸外国		来献琉璃	上記と同じ?
呉孫権・嘉禾7	238	三国志・呉書・呉主伝	扶南	扶南王	楽人、方物	
呉孫権・赤烏6	243	三国志・呉書・呉主伝	扶南	扶南王・范旆	楽人、方物	
晋武帝・泰始初	265	晋書・扶南伝	扶南			扶南王は范尋?
晋武帝・泰始4	268	晋書・武帝紀	扶南、林邑			
晋武帝・太康5	284	晋書・武帝紀	林邑			
晋武帝・太康年間	280 ~ 89	梁書・扶南伝	扶南	扶南王・范尋	遣使貢献	
晋武帝・太康年間	280 ~ 89	晋書・四夷伝	大秦			
晋穆帝・升平元年	357	晋書・諸夷列伝	扶南	扶南王・竺栴檀(『梁書』では天竺栴檀)	訓象	
前秦・苻堅・建元17	381	晋書・載記 第13	天竺		火浣布(石綿のこと)	
晋孝武帝・太元6	381	晋書・苻堅伝	天竺		火浣布	上と同じ記事
晋孝武帝・太元中	376 ~ 96	晋書・四夷伝	林邑	林邑王・胡达	金盤、金椀、金鉦	
晋安帝・義熙13	417	晋書・安帝紀	林邑		訓象、白鸚鵡	
宋武帝・永初2	421	宋書・夷蕃列伝	林邑	林邑王・范陽邁	遣使貢献	
宋文帝・元嘉元年	424	宋書・良吏列伝	林邑		生口、大象、金銀、古貝	
宋文帝・元嘉5	428	宋書・文帝紀	天竺		方物	
宋文帝・元嘉5	428	宋書・夷蕃列伝	獅子(スリランカ)	王・刹利摩訶南	奉表、牙台像(象牙製仏像)	
宋文帝・元嘉5	428	宋書・夷蕃列伝	天竺迦毗羅	国王・月愛	遣使奉表。金剛指環、摩勒金環諸方物、赤白鸚鵡各一頭	
宋文帝・元嘉7	430	宋書・夷蕃列伝	林邑	林邑王・范陽邁	遣使	

宋文帝・元嘉7	430	宋書・夷蕃列伝	訶羅陀国	国主・堅鎧(hard shield ひよつとしてvarman?)	遣使奉表	毗初と婆田という名前の人物が使者。「隣国が競って我が国を侵すので、宋に守ってほしい。また交易が円滑におこなえるように守ってほしい。広州への貿易船が帰ってこないのので、その安全を保証してほしい」
宋文帝・元嘉7	430	宋書・夷蕃列伝	呵羅単(閻婆洲を治める)		金剛指環、赤鸚鵡、天竺国白疊古貝、葉波国古貝等	古貝、吉貝など=木綿、パンヤのこと。カボック、インドワタノキなどからとれる繊維
宋文帝・元嘉10	434	宋書・夷蕃列伝	呵羅単	国王・毗沙跋摩	奉表	
宋文帝・元嘉10	434	宋書・夷蕃列伝	林邑	林邑王・范陽邁	遣使上表、献方物	
宋文帝・元嘉11	434	宋書・夷蕃列伝	扶南	国王・持黎跋摩	遣使奉献	
宋文帝・元嘉12	435	宋書・夷蕃列伝	林邑	林邑王・范陽邁	遣使贡献	
宋文帝・元嘉12	435	宋書・夷蕃列伝	扶南	国王・持黎跋摩	遣使奉献	
宋文帝の世		梁書・諸夷列伝	扶南	国王・持黎陀跋摩	表・方物	国王・持黎跋摩と同一人物?
宋文帝・元嘉12	435	宋書・夷蕃列伝	閻婆婁達国	国王・師黎婆達陀阿羅跋摩	献使奉表	正使・仏大陀婆、副使・葛抵
宋文帝・元嘉12	435	宋書・夷蕃列伝	獅子		遣使奉献	
宋文帝・元嘉13	436	宋書・夷蕃列伝	呵羅単		上表	子が篡奪
宋文帝・元嘉15	436	宋書・夷蕃列伝	扶南	国王・持黎跋摩	遣使奉献	
宋文帝・元嘉15	436	宋書・夷蕃列伝	林邑		遣使	このころ、林邑が積極攻撃
宋文帝・元嘉16	436	宋書・夷蕃列伝	林邑		遣使	
宋文帝・元嘉18	436	宋書・夷蕃列伝	林邑		遣使	
宋文帝・元嘉18	435	宋書・夷蕃列伝	蘇摩黎国	国王・那隣那羅跋摩	遣使献方物	
宋文帝・元嘉25	448	宋書・夷蕃列伝	扶南	国王・持黎跋摩	遣使奉献	
宋文帝・元嘉26	449	宋書・夷蕃列伝	呵羅単		遣使	
宋文帝・元嘉26	449	宋書・夷蕃列伝	婁達国	国王・舍利不陵伽跋摩	遣使、方物	婁達国王にされる(婁達国の間違いか)
宋文帝・元嘉26	449	宋書・夷蕃列伝	婁皇国	国王・舍利槃羅跋摩	方物41種	婁皇国王に除す
宋文帝・元嘉28	451	宋書・夷蕃列伝	婁皇国		贡献	
宋文帝・元嘉28	451	宋書・夷蕃列伝	婁達国			
宋文帝・元嘉29	452	宋書・夷蕃列伝	呵羅単		献方物	長史・婁和沙彌が使者(長史:外交担当役人)
宋文帝・元嘉中	420-422	梁書・諸夷列伝	盤盤		遣使	
宋孝武帝・孝建2	454	宋書・夷蕃列伝	林邑	林邑王・范陽邁	遣使	長史・范龍跋が使者(揚武將軍に除す)(四品官)
宋孝武帝・孝建2	454	宋書・夷蕃列伝	斤陀利国	国王・釈婆羅那隣陀	献金銀宝器	長史・竺留陀
宋孝武帝・孝建3	455	宋書・夷蕃列伝	婁皇国		奉表献方物	長史・竺那槃智を振威將軍とする(四品官)
宋孝武帝・大明2	458	宋書・林邑国伝	林邑	林邑王・范神成	表、金銀器、香布、諸物	長史・范流
宋孝武帝・大明3	459	宋書・夷蕃列伝	婁皇国		赤白鸚鵡	
宋孝武帝・大明8	464	宋書・夷蕃列伝	婁皇国			
宋孝武帝・大明中	457-464	梁書・諸夷列伝	盤盤		遣使	
宋明帝・泰始2	466	宋書・夷蕃列伝	婁皇国			長史・竺須羅達と前長史で振威將軍・竺那槃智を龍驤將軍とする(四品官?)
宋明帝・泰始2	466	宋書・夷蕃列伝	天竺迦毗羅		遣使贡献	使者・竺扶と大竺阿彌を建威將軍とする(四品官)
宋明帝・泰豫元年	471	梁書・諸夷列伝	林邑		遣使、方物	
宋明帝・泰豫2	472	宋書・夷蕃列伝	林邑		遣使、方物	

宋廢帝・元徽元年	473	宋書・夷蕃列伝	婆梨国		遣使奉獻	
齊武帝・永明2	484	南齊書・東南夷列伝	扶南	王・闍耶跋摩	金鑲龍王像1体、白檀像1体、牙塔2体、古貝2双、琉璃蘇釧2口、玳瑁檳榔杵1枚	天竺道人・釈那加仙を使者とする。広州から自分の貨物を積み、釈那加仙も同船にのって帰国しようとしたところ、風により林邑に漂着。林邑王は貨物と彼の私財を奪った。その復讐のために齊の軍勢力を要請
齊武帝・永明年中	483-493	梁書・諸夷列伝	林邑	范文贇		
齊武帝・永明9	491	南齊書・東南夷列伝	林邑	(篡奪者・范当根純)	金筆(金製座布団)等物	持節都督縁海諸軍事安南將軍林邑王の爵号を得る(三品官)
齊武帝・永明10	491	南齊書・東南夷列伝	林邑	范諸農(范陽邁の子孫)	遣使貢獻の記載なし	持節都督縁海諸軍事安南將軍林邑王の爵号を得る(三品官)
齊明帝・建武2	495	南齊書・東南夷列伝	林邑	范諸農	遣使貢獻の記載なし	鎮南將軍に進号(二品官)
齊明帝・永泰元年	495	南齊書・東南夷列伝	林邑	范諸農	遣使貢獻の記載なし	諸農、海難死。子・文款、王となる。代々、假節都督縁海諸軍事安南將軍林邑王(三品官)
梁武帝・天監元年	502	梁書・諸夷列伝	干陀利国	王・瞿曇脩跋陀羅	玉盤等物	死後、子の毗邪跋摩が王となる
梁武帝・天監2	503	梁書・武帝紀、諸夷列伝	扶南	橋陳如闍耶跋摩	珊瑚仏像、方物	安南將軍扶南王(三品官)
梁武帝・天監初		梁書・諸夷列伝	大秦	王・屈多	琉璃唾壺、雜香、古貝等物	
梁武帝・天監9	510	梁書・武帝紀	林邑		白猴1匹	持節都督縁海諸軍事威南將軍林邑王(五品官)
梁武帝・天監9	510	梁書・諸夷列伝	林邑	范天凱		
梁武帝・天監10	510	梁書・諸夷列伝	林邑	范天凱		
梁武帝・天監10	511	梁書・諸夷列伝	扶南	闍耶跋摩		
梁武帝・天監13	514	梁書・諸夷列伝	林邑	范天凱		
梁武帝・天監13	514	梁書・諸夷列伝	林邑			
梁武帝・天監13	514	梁書・諸夷列伝	林邑	弼靄跋摩		范天凱、病死。子の弼靄跋摩が王になる
梁武帝・天監13	514	梁書・諸夷列伝	扶南	闍耶跋摩		
梁武帝・天監14	515	梁書・諸夷列伝	狼牙脩	阿撤多	遣使、奉表	闍耶跋摩、死。庶子・留陀跋摩が嫡弟を殺して王になる
梁武帝・天監16	517	梁書・諸夷列伝	扶南	王・留陀跋摩		
梁武帝・天監16	517	梁書・諸夷列伝	婆利国		遣使、奉表。金席等	王姓は橋陳如(カウンディンヤ)
梁武帝・天監17	518	梁書・諸夷列伝	干陀利国	王・毗邪跋摩	遣使、奉表。金芙蓉、雜香藥等	
梁武帝・天監18	519	梁書・諸夷列伝	扶南	王・留陀跋摩	天竺栴檀瑞像、婆羅樹葉(インド産の仏樹)、火齊珠(黄赤色の鉱物)、鬱金(うこん)、蘇合香	
梁武帝・普通元年	520	梁書・諸夷列伝	扶南			
梁武帝・普通元年	520	梁書・諸夷列伝	干陀利国			
梁武帝・普通3	522	梁書・諸夷列伝	婆利国	王・頻伽	白鸚鵡、青虫、兜鍪(かぶと)、瑠璃器、古貝、螺杯、雜香、藥等数十種	
梁武帝・普通7	526	梁書・諸夷列伝	林邑	高式勝鎧		持節都督縁海諸軍事綏南將軍林邑王の爵号を得る(五品官)
梁武帝・大通元年	527	梁書・諸夷列伝	林邑			
梁武帝・大通元年	527	梁書・諸夷列伝	盤盤	盤盤王	遣使、奉表	
梁武帝・大通元年	527	梁書・諸夷列伝	盤盤	盤盤王	5月にまた遣使	

梁武帝・大通2	528	梁書・諸夷列伝	扶南			
梁武帝・中大通元年	529	梁書・諸夷列伝	盤盤			牙像、牙塔、沈檀香等香數十種
梁武帝・中大通2	530	梁書・諸夷列伝	林邑	高式律陀跋摩		持節都督縁海諸軍事綏南將軍林邑王の爵号を得る（五品官）
梁武帝・中大通2	530	梁書・諸夷列伝	丹丹	丹丹王		遣使、奉表。牙像、牙塔各2体、火齊珠、古貝、雜香、藥等
梁武帝・中大通6	534	梁書・諸夷列伝	林邑			方物
梁武帝・中大通6	534	梁書・諸夷列伝	盤盤			菩提国真舍利、画塔、菩提樹葉、詹糖等香
梁武帝・大同元年	535	梁書・諸夷列伝	扶南			
梁武帝・大同元年	535	梁書・諸夷列伝	丹丹			金、銀、琉璃、雜宝、香藥等物
梁武帝・大同5	539	梁書・諸夷列伝	扶南			生犀
梁武帝・大同5	539	梁書・諸夷列伝	扶南			仏髮（長さ1丈2尺）
梁武帝・大同5	539	梁書・武帝本紀	扶南			生犀



1. アントニヌス・ピウス金貨



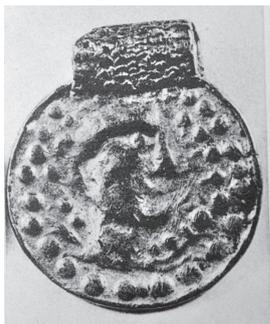
2. マルクス・アウレリウス・
アントニヌス金貨



3. ウィクトリヌス銅貨



4. 青銅製ランプ



5. ブッラ (オケオ遺跡出土)



6. ドラクマ銀貨 (プノンペン出土)

図1. 西方からの招来品



1. ウトン



2. ナコンチャイシ



3. ドン・シーマハーソット



4. サ・モラコットの仏足と法輪



5. ムアン・ファデー



6. ムアン・セーマ

図2. ドヴァーラヴァティの都市遺跡



1. シーテープ



3. バーン・チェンヒアン



2. カオ克蘭ノック仏塔



4. アンコール・トム



5. ムアン・シン



6. スコータイ

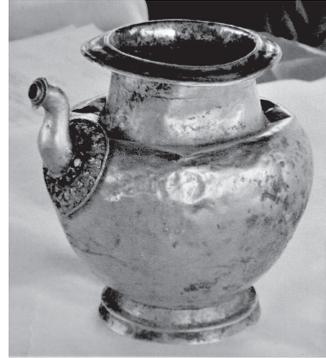


7. サコン・ナコン

図3. ドヴァーラヴァティールとクメールの都市遺跡



1. ノン・ファトン出土の金板



2. ノン・ファトン出土の金製クンディ



3. ノン・ファトン内のセーマ



4. バーン・シーカイのセーマ



5. バーン・カーンのセーマ

図4. メコン東岸のドヴァーラヴァティー関連遺物